

井の頭公園 度々描く

文人の武蔵野

大宰治は、20代のほとんどもを東京放浪に費やしますが、30歳を前にして転機を迎えます。1939年1月8日に結婚式を挙げると、朝から午後過ぎまで机に向かい、規則的に執筆する生活を始めます。同年に発表された「富嶽百景」や「黄金風景」は、妻に口述筆記をさせて仕上げた作品です。「黄金風景」では「短篇小説コンクール」に入選。同じ頃、「若い未知の愛読者」

大宰治 ⑤



井の頭公園

から送られた日記をもとに創作した「女生徒」で北村透谷記念文学賞(副賞)を受けます。39年9月1日には、大宰が「井の頭公園裏の麦畑の中に新築された借家と呼んだ三鷹の家に移転します。40年には「走れメロス」「きりぎり

す」「ろまん燈籠」などの秀作を着実に発表し、文壇に足場を築きます。原稿や講演の依頼も増え、大宰に師事する小説家田中英光や小山清、熱烈なファンが訪れるようになります。

大宰は井の頭公園を気に入り、「乞食学生」「花火」「犯人」など15作品に登場させました。「武蔵野新聞社」「武蔵野町」「武蔵野館」といった武蔵野を冠した固有名も作品に使いました。他方で「東京八景」では、三鷹から見える「武蔵野の夕陽」を東京名物の絶景に数えました。東京における過去の足跡には都心部を中心とする序列意識が反映されていました。芝や銀座の磁場から逃れるには、周縁の中心化が必要でした。大宰の武蔵野は、そのた

めの思想でもあったのです。実際に大宰が家族と住んだ借家の窓辺からは、地平線すれすれまで夕陽が見渡せたそうです。作中の「武蔵野の夕陽」はリアリズムというよりは、東京生活の終焉と再出発の象徴でした。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

おすすめの1冊

「三鷹ゆかりの文学者たち」

大宰治を中心に三鷹ゆかりの文学者を解説した大河内昭爾監修「三鷹文学散歩」(1990年)を引き継いで、大宰以降の現代作家の三鷹を紹介するのが同冊子(2010年)です。角田光代や川上弘美の描いた井の頭公園と大宰のそれとを比べてみるができます。



(三鷹市スポーツと文化財団)

武蔵野



武蔵野支局 〒180-0006
武蔵野市中町1の13の1 3F
電話 0422(51)3131
FAX 0422(51)3133
musasino@yomiuri.com
都内版編集室 電話03(3217)1465・1466
江東支局 電話03(3631)6116
立川支局 電話042(523)4477
ホームページ www.yomiuri.co.jp/local/

購読は **0120-4343-81**

【広告】読売Palette 03(6272)9027
【折込チラシ】 0120-03-4343
【読売旅行】 03(5550)0666

8月19日(木曜日)
旧 7月12日<赤口>

■ あすの暦	通日 231	=東京標準= 満潮 0.16 16.11 干潮 8.27 21.01 (若潮)
	月齢 10.5 (正午)	
日出	5.03	
日入	18.26	
月出	16.19	
月入	0.55	